

学級担任が行う「子どもの居場所づくり」に関する検討

発表者 大塚彩花（上越教育大学大学院生）

Key Word 居場所づくり 担任教師 学級 個別指導 集団指導

1. 本研究の目的、問題の所在

本研究では、学級の中で居場所がないように見える子どもに対して、担任教師がどのようにアプローチをするのかを研究することを目的とする。文部科学省（2016）の「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」は、不登校が生じないための魅力ある学校づくり、「心の居場所」としての学校づくりを進めることが必要であると指摘する。教師はそのために一人ひとりの児童の学校に来たくない理由をよく理解して、適切な働きかけをすることが必要である。生徒指導リーフ（国立教育政策研究所，2015）では、居場所づくりが教職員に求められており、児童生徒が安心できる、自己存在感や充実感を感じられる場所をつくることの重要性が挙げられている。

文部科学省（2019）の「児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」によると、小学校における不登校の児童は年々増加している。平成28年度は30,448人だが、平成30年度は44,841人である。不登校になってしまう理由は、友人関係が一番多い。友人関係がうまくいかなくなってしまう、学級に居場所が感じられず不登校になってしまうケースも少なくないのではないだろうか。

学校に居場所がない子どもがいるとすれば、それはとても重要な問題であると考えられる。なぜならば、居場所がなければ安心感がなく、不安になってしまうと考えられるからである。ここでは、いわゆる「心の居場所」のことを指して居場所とし、学級を安心でき、自己存在感や充実感が感じられる居場所とすることが必要であると位置づける。学級に居場所があると感じれば、学校は行かなければいけないものと強制されるのではなく、自ら楽しいから学校に行くという考えになるのではないか。そのために、何かあれば相談できる先生や友達、一緒に頑張れる仲間、嫌なことがあっても乗り越えられるようなクラスの雰囲気、学校には行きたくないけど学級が好きだから行く、みんなに会いたいなど、学級がそのようなクラスとなることが必要であると考えた。そこで、担任教師に必要な働きかけや関わり方に関するこれまでの文献・論文等での指摘や提案について検討したい。

2. 研究の方法

本発表では、居場所づくりのための学級担任ができる多様なアプローチについて、まず一般的に入手可能な専門書での指摘を整理した。「居場所づくり」で検索したが、具体的に居場所を作るためのアプローチ方法があまり出てこなかったため、「気になる子」で検索し、ヒットした文献『教室で気になる子』の周辺の本を探った。

選んだ文献は、A：『教室で気になる子』（國分康孝・國分久子）、B：『気になる子にこんな「ひとこえ」を』（長野郁也・花井正樹・生田純子）、C：『「違い」がわかる生徒指導』（滝澤雅彦・藤平敦・吉田順）、D：『担任になったら必ず身につけたい！小学校低学年困った場面の指導方』（広山隆行）、E：『担任になったら必ず身につけたい！小学校高学年困った場面の指導方』（広山隆行）である。

不登校になってしまう原因で一番多い理由は、友人関係であるので、日常生活や学業面での気になる子

どもではなく、人間関係の面で気になる子どもに対するアプローチが記述されている部分を中心にまとめた。気になる子どもの具体的なアプローチが記述されている部分を一つのアプローチごとに一項目として抜き出し、それが誰に対する働きかけなのかについて対象を区分した。気になる子ども本人への働きかけは個別指導、学級集団全体に対する働きかけの場合には集団指導として分類し、一覧表を作成した。以下では、表 1 に基づいて、全体としては誰に対するアプローチがどのように必要だと考えられているのかについて考察する。表中の「学級担任の働きかけ」欄には、各文献から抽出された具体的アプローチを筆者が要約した表現で一項目ずつ列挙した。各文末のアルファベットは文献の番号、p.表記はそのアプローチ内容が紹介されていた頁である。

表 1 5 文献で紹介されているアプローチの内容一覧（人間関係について）

気になる子	学級担任の働きかけ	アプローチの対象
悪口を言う子	<ul style="list-style-type: none"> ・ ポジティブな言葉かけ A : p.40 ・ アサーショントレーニングをベースとした授業 A : p.40 ・ 直接謝らせる E : p.144 ・ 相手が傷ついているならいじめであると言う E : p.144 	個別 集団 個別 個別
周りに迷惑をかける子	<ul style="list-style-type: none"> ・ 保護者に見に来てもらう A : p.43, 47 ・ (ポジティブな見方をするような活動) 違いを認め合える環境作り A : p.62 ・ 自分に価値があると実感させる A : p.49, 59 ・ 自分の行動の良い悪いを選択させる A : p.41, 46 ・ ロールプレイし、ブレインストーミングする A : p.54, 59 ・ 絶対に手は出さないと念押し D : p.103 ・ 寄り添い、教師が代弁する D : p.103 ・ 10 数えてとクールダウンさせる D : p.103 ・ 些細なことも見逃さない C : p.9 ・ どの場面でどうすればよかったのか見つけさせる C : p.9 	個別 集団 個別 集団 集団 個別 個別 個別 個別 個別
保健室によく行く子	<ul style="list-style-type: none"> ・ 固定的なグループ化を防ぐ A : p.65 ・ 養護教諭と連携 E : p.75 ・ 保健室に行く目的や原因を探る E : p.75 ・ 特定の教科で起きていないかどうか記録しておく C : p.68 ・ 人間関係に問題がないか調べる C : p.68 ・ 養護教諭と連携し、病院で診てもらうこと親子に勧める C : p.68 	集団 個別 個別 個別 個別
友だちがつかれない子	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話しかける A : p.68 ・ 教師と一緒にいる空間の設定 A : p.68 ・ 構成的グループエンカウンターのエクササイズを導入 A : p.68 ・ つなぎ役 B : p.25 ・ 仲間外れになってしまうのであれば、その理由を探る C : p.78 	個別 個別 集団 個別 個別

	<ul style="list-style-type: none"> ・本人の好みを捉える D : p.44 ・学級全体で遊ぶ日をつくる D : p.44 ・特別な支援が必要かどうかを確認する D : p.44 ・声をかける E : p.147 ・いじめにつながるかどうかを確認 E : p.147 ・相談を受けたら、選択肢を複数伝える E : p.147 	個別 集団 個別 個別 個別
自信がない子	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的に褒める A : p.72 ・長所を伝える A : p.72 ・達成感や成就感を味わわせる A : p.73 ・人の役に立つような体験を積ませる A : p.72 ・励ましのつもりで自信をもちなさいというのは逆効果 B : p.22 ・良さを認める B : p.22 	個別 個別 個別 個別 個別 個別
無気力な子	<ul style="list-style-type: none"> ・構成的グループエンカウンターを計画的に実施 A : p.87 ・あらゆる場面で、良いところを見出し、褒める A : p.87 ・マンガやゲームなど、興味あることについてやろうとする気力をもっていることを認める A : p.87 ・保護者に対して、家庭内での様子をじっくり聞き、具体的な言葉かけの仕方をアドバイスする。勉強などに偏らず、テレビやマンガ、ゲームなど、興味関心のある話題に触れるようにアドバイス A : p.87 ・無気力そのものを批判せず、背後にどんな気持ちが隠されているのかに関心を向ける B : p.28 	集団 個別 個別 保護者 個別

3. 考察

5冊の文献から、人間関係の面で気になる対象の子どもに応じて担任教師はどのようなアプローチを行っているのかについて、個別指導と集団指導に分類した。個別でのアプローチと集団でのアプローチがあるが、違いについて、文部科学省（2008）の「生徒指導の意義と原理」では、次のように示されている。すなわち、個別指導は、個を高めることを意識して行う指導と表現できる。ある個人を集団から離して指導することが効果的なこともあるが、その個人を集団の働きかけに生かしながら、その人間関係の中で指導することが効果的な場合があることに留意する必要がある。集団指導は、集団を高めることを意識して行う指導と表現できる。個々の児童生徒の能力を最大限に発揮させることが集団としての高まりにつながることもあるが、個々の能力を互いに調和させていくことが集団としての高まりにつながることもあると示されている。

5冊の文献の中で、個別で行っている場合と、集団で行っている場合について、対象となる子どもによってアプローチの対象も変わってくる。担任教師が何をねらいとして行っているのか、教師によっても考え方は様々あると考えられる。

例えば、周りに迷惑をかける子どもに自分の行動の良い悪いを判断させる場合について、AやCではクラス全体で、本人や周りの子どもに、こういう時どうすればいいのか、これをしてもいいのかなどと、今起こった出来事に対し、その場で全体に指導していた。それを集団指導と分類した。しかし、同じ周り

に迷惑をかける子どもにどの場面でどうすればよかったのか考えさせるときには個別指導も行ってた。同じ、考えさせることでも、みんなでやる場合と個別で行う場合とがある。クラス全体で行うときは、他の児童とも情報を共有しなくてはいけない場合、または集団としての成長をねらいとしている場合は、集団に対するアプローチがとられていると考えた。集団を対象とするメリットは、こういうことをやったら叱られるとその子どもだけでなく、周りの子どもにも理解させることができる点である。また、個人としてももちろんのこと、集団としての成長につながれると考えた。

表 1 全体では個別指導が圧倒的に多かったことから、一人ひとりの居場所を作るためには、集団指導がとても大切であるが、個別指導の重要性がより高いのではないかと考えていたが、対象の子どもによっても、アプローチの仕方を考えなくてはならない。アプローチが効果を発揮するかどうかは、当然個人によって変わってくるので、一人ひとりのニーズに合わせて対応することが大切である。しかし、このような文献の整理から、気になる子どもの行動特性に応じて、表 1 にまとめたようなアプローチ方法が有効であると考えられていることと、特に個別指導が重要であることが明らかになった。

4. 結論、課題

個別指導と集団指導に分けて考察したが、気になる子どもに対してのアプローチでは個別指導が圧倒的に多かった。このことから、子ども一人ひとりにあったアプローチを個別でもしていくことが重要であることが確認された。また、個別指導と集団指導の観点で整理したが、他に保護者や養護教諭との連携の重要性も見えた。

今回は、不登校になってしまう原因として、一番多かった友人関係から、人間関係についてまとめた。しかし、子どもが学級に居場所がないと感じてしまう理由は、他にも学業面のことや学校生活のことについても考えられる。居場所を感じられない子どもにあったアプローチについての研究がさらに必要である。

5. 引用参考文献

広山隆行、『担任になったら必ず身につけたい！小学校低学年困った場面の指導法』、明治図書、2016年

広山隆行、『担任になったら必ず身につけたい！小学校高学年困った場面の指導法』、明治図書、2017年

国立教育政策研究所、生徒指導リーフ、『絆づくり』と『居場所づくり』、2015年

國分康孝・國分久子『教室で気になる子』、図書文化社、2003年

文部科学省、「不登校児童生徒への支援の在り方について（通知）」、2016年

文部科学省、「児童生徒指導の問題行動・不登校生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」、2019年

文部科学省、「生徒指導の意義と原理」、2008年

長野郁也・花井正樹・生田純子、『気になる子にこんな「ひとこえ」を』、ほんの森出版、2000年

滝澤雅彦・藤平敦・吉田順、『「違い」がわかる生徒指導』、学事出版株式会社、2018年